

多文化共生と言葉

6年 A.M.K.さん

先日、某テレビ番組を見ていて違和感を覚えました。その番組にはタレントのウエンツ英二さんが出ており、彼は自分の生い立ちについて聞かれると「僕は日本とドイツ系アメリカ人のハーフなので」と言いました。至って普通の答え方です。しかし彼の言葉と同時に出されたテロップは「僕はダブルなので」と表記していました。その後も何度かウエンツさんが「ハーフ」という言葉を使うたびにご丁寧に「ダブル」とテロップで言い換えられていました。私は不思議でたまりませんでした。ウエンツさんは自分のことを語っているのにも関わらず、その中で使った言葉は、適切でない、とみなされた訳です。私がこれに違和感を覚えたのは共通する点があるからかもしれません。私は日本人の母と中国系アメリカ人の父の間に生まれました。名前にカタカナ表記のミドルネームがあり、幼い頃から初対面の人には毎回と言っても過言ではないほど「ハーフ？」と聞かれてきました。またか、とは思いつつもこの質問をされて傷ついたり、嫌だと思ったりしたことは一度もありません。そして私自身も「日本とアメリカのハーフです。」と答えてきたため「ハーフ」、という単語に抵抗はなく自分のアイデンティティの1つとして使ってきた言葉です。ですから、近年急に「ハーフ」が不適切な言葉だという社会の風潮を知り、私自身とても混乱していますし、それは私だけではないでしょう。「ハーフ」の半分という意味がネガティブな印象を抱かせることから「ダブル」と呼ぶようになったと言われていました。しかしこのセオリーが私には理解できません。言葉の意味を数値化すると1/2から2と数は4倍になっています。分数から整数にただだけでことを解決しようとしたのであれば、それは安易すぎる気がします。私もウエンツさんも当事者であります。私たちが自分自身を表現する際に使ってきた言葉の一体何が不適切であるのか分かりません。いつか私と同じようなバックグラウンドを持つ人に出会ったら「ダブル」と呼ばれることをどう思うか聞いてみたいと思います。また、少し気になったのは以前テレビや雑誌などでよく使われていた「ハーフ顔モデル」や「ハーフ顔メイク」が「ダブル顔〇〇」になるのかと考えると今はしっくりきません。

なぜこれほどに呼び方が変わったのか。私なりの考察はこうです。多文化共生、グローバル化、多様性、という言葉が近年よく耳にする今、自分と異なる文化を受け入れる姿勢は必要不可欠と考えられています。多文化共生社会を日本で作り上げるため、大学、企業はダイバーシティを実現させようと国際色を強め、恵泉でも一日修養会では青山学院大学教授の塩谷直也先生が話してくださった「共に生きる」と言うお話を通してグループごとに多様性について深く話し合い、私たちがこれからどのように生きていくかを考えました。これらは今の時代を生きる私たちにとっても大切なことです。しかし、多文化共生を意識しすぎるあまり、私たちが発言をする際に無意識のうちに相手が傷つく呼び方をしないよう、言葉選びに慎重になりすぎているのだと思います。悲しいことではありますが日本語にも相手を見下す意味が含まれる差別用語はあり、使われてきたのは事実です。グローバル化が進み国際色豊かになってきた今では卑劣な差別用語を使う人は昔より少ないです。人々の自分が発す

る言葉に対する責任感が強まったのは非常に良いことですが、意味が悪くないのにも関わらず言葉を変えられたり、未だに意味の微妙な言葉も使われたりしています。「外人」という響きが嫌だという人がいることから「外国人」が適切と思われていますがそもそもこの2つの意味は同じです。日本の外からきた人、と漢字からも分かります。問題はこの言葉自体ではないですか？私たちが外国に行きその国の人に「外国人だ」と言われてもあまり良い気がしません。「日本からきた人」の方が良いのか、「日本人」と特定されたほうが良いのか本当に正しい表現は何なのか、なかなかわからないものです。

この感話でいくつかのグレーなワードとそれに対する私の意見を書いてきましたが、将来インターナショナルな舞台に羽ばたくこと、グローバルな環境で活躍することを期待される私たちは他者と共存していく中で多角的に物事をみななければいけません。私が読んだ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本には「他人の靴を履いてみる」という言葉が紹介されています。私たちは一人一人見えている世界、感じていること、そして周りの環境が異なります。そのため、相手を理解するためには自分の立場から考えるのではなく、自分が相手になったつもりで、つまり相手の靴を履いて考えなくてはなりません。多種多様な人と付き合っていく中で自分の言動に気をつけなければいけません。他人を理解する力、“エンパシー”を忘れずに相手と関わればダイバーシティを無理せず自然な形で作り上げていく事ができるのだと私は信じています。